

# 外科学講座チェアマン巻頭言 2018

## 我々が18年かけて到達したこの高みを大地に刻み歴史に残そう

外科学講座の2018年の最大の出来事はなんと言っても森川利昭教授のご退任と、大塚 崇教授のご着任でしょう。2001年にかつて4つあった外科教室が統合され一人のチェアマン、一人の医局長、一つの医局という本格的な大講座制が発足し、初代チェアマンには青木照明教授が就任されました。そして2006年には矢永勝彦消化器外科分野担当教授、森川利昭呼吸器、乳線・内分泌外科分野担当教授、大木隆生小児、血管外科分野担当教授の3分野体制が確立し、さらに2007年の大木チェアマン就任を経て現在に至る外科学講座の礎が確立されました。従って森川教授のご退任と大塚教授のご着任は大講座制発足後初めての分野担当教授交代、13年ぶりの新・分野担当教授の誕生となりました。

私は外科学講座を代表し呼吸器、乳線・内分泌外科分野担当教授選考委員会委員に選任されていましたが、外科学講座は3分野が一つの屋根の元に一つの講座として有機的に運営されているため本選考は講座の命運を決するとても責任の重い仕事でした。全国公募の結果、学内外から11名の応募がありました。計7回の選考委員会審議、6名の2次候補者によるプレゼンテーション、そして3つの大学への手術見学を経て、慶應義塾大学医学部准教授の大塚 崇先生が選考されました。チェアマン就任以来、講座運営においては「トキメキと安らぎのある村社会」を標榜し、組織に欠かせない秩序・求心力・帰属意識涵養のために「生え抜き尊重主義」(中途入局禁止)を掲げてきた張本人としては内部候補を優先したい気持ちは山々でした。しかし、それを補ってあまりある魅力と実力が大塚教授にあり、選考委員会においても教授会においても圧倒的多数で選考されました。もしこの人事が失敗に終わったら責任をとって切腹はともかくとしてチェアマンを辞任する覚悟でしたが、大塚教授が着任されてから半年を経た現在、それは杞憂であったことは明白です。その穏やかで実直なお人柄、卓越した外科医としての技量、そして研究指導力はいかなく発揮されており、チェアマンとしても、選考に関わった者としても誇らしく感じると同時に安堵しています。呼吸器外科のスタッフに折に触れて個別意見を聞きましたが異口同音に「完璧な上司」との評です。なお慈恵医大の教授会の2-3割は他学卒の教授により占められており、多くの大学から人材を受け入れています。創立137年の本学史上で慶應義塾大学卒業生を迎えるのは初めての事でした。本学は1881年に学祖高木兼寛が成医会講習所を創設したことに始まりますが、その共同創立者がその前年に廃止された慶應義塾医学所

外科学講座・統括責任者 大木隆生(昭和62年卒)

初代校長だった松山棟庵先生でしたので、学祖もこの人事を歓迎している事でしょう。

教授選考と言えば、2019年度で矢永勝彦先生が定年退職されますが、その後任選考は既に始まっており全国公募をしている最中です。私は選考委員の一人

ですが、本学消化器外科分野には多くの有能な功労者がいますので、何としても内部候補から選考されることを願っています。また、同分野は医局員の約半数を占める大所帯ですので、今後は肝胆膵外科と消化管外科に分割する事も検討されています。将来的には呼吸器と乳線・内分泌外科、小児と血管外科も分割されるべきですが、こうした分野分割は外科単独で決められる問題ではありませんし、容易ならざる時間のかかる作業です。ただし外科学講座内の分野分割は我々が十数年前に成し遂げたナンバー外科統合事業と違って利害の対立も異文化融合もない、はるかにスムーズな作業です。来年の本稿では、今年の大塚 崇先生同様に、新しい消化器外科分野担当教授を胸を張って皆さまにご紹介できる事を願うばかりです。

さて、2019年7月には矢永教授が会長として日本消化器外科学会を主催されますが、慈恵医大としては櫻井健司・旧第1外科教授が1992年に第40回総会を主催されて以来27年振り、3回目の快挙です。3年前の会長決定時から、矢永会長の指揮のもと消化器外科スタッフを中心に準備が進められ外科同門会と外科学講座も一丸となってサポートしてまいりました。当初は12年振りに会場費などが高い東京開催であること、臨床研究法の改正の影響で発表演題数が減る可能性があることから学会開催に際して財政的な心配がありました。同門会からの経済的支援と矢永会長の企業共催、協賛を得るご尽力、さらに趣向が凝らされた渾身のプログラム立案により、現時点の速報値で黒字収支の見込みが立っています。尽力してくれた消化器外科スタッフ、医局員、そして羽生信義同門会会長を始めとするOB諸氏に感謝します。本会が慈恵医大らしい学会として成功裏に開催され、矢永教授が九州から慈恵医大に着任されてから16年間の有終の美を飾られることを心から祈念しています。



学会と言えば、2018年8月には第60回国際脈管学会と第13回Japan Endovascular Symposium研究会(JES)を血管外科で主催しました。開会式では元経団連会長の御手洗富士夫氏から祝辞を頂きましたが、これにまつわる秘話を紹介します。当初、開会式スピーチの依頼を正式なキャンオン総務部・秘書室ルートでしたところ「先約あり」とけんもほろろに断られました。そこで、御手洗さんの携帯電話に電話し直接お願いしたところ「やむなし。先約を断る。その代わりにスピーチ原稿を代筆してほしい」と快諾していただきました。何事も押すボタンを間違えてはならないと改めて知りました。はたして開会式本番では私の用意した国際脈管学会60年の歴史に触れつつ本会の意義を記した「完全無欠」の原稿は全てボツにされ、スピーチは完全に御手洗さんご自身のお言葉となりました…しかも、「大木氏は敬愛するセルフメイドパーソンであり、良きゴルフ同好の士だからスピーチを引き受けた。今後の慈恵医大血管外科と本会に期待するところ大である」と身に余るお言葉を頂きました。キャンオン会長としてもご多忙ですのでそのまま用意された原稿を読まれても何ら問題はないはずですが、ここまでしてくださったそのご姿勢に一同感銘を受けました。以前、読売新聞・主筆 渡辺恒雄氏に祝辞を依頼したときも全く同じ事が起こりましたが、「頼み事をする時は忙しい人に頼め」の格言が正しい事を物語っています。さて、肝心の学会は13カ国から920名の参加を得ましたが、個人的に嬉しかったのは手術不能の弓部大動脈瘤治療のために考案したRIBS・枝付きステントグラフト術が評価され、本会のLifetime Research Achievement Awardを受賞できた事です。今後は本手術が標準治療の一角を占めることができるようさらなる改良と発信に努める決意を新たにしました。また、本会開催に当たりご寄付・ご協力いただいたOB諸氏に深く感謝します。そして2019年には第25回日本血管内治療学会と第14回JESを主催する予定ですので、乳線・内分泌外科 武山 浩教授主催の第31回日本内分泌外科学会ともども、温かく見守っていただけましたら幸いです。

当講座はゲマインシャフト型組織を目指していますので医局員同士の親睦を深める行事も例年通り活発に執り行いました。すなわち第10回医局旅行(熱海市)、第118回~130回月例チェアマント食会(新橋・鳥三)、第21、22回大木杯ゴルフコンペ(キングフィールズCC)、2回の慈刀会セミナー、2回の外科同門会、第6回外科道大会、第2回チェアマンインビテーション新人ゴルフ合宿(軽井沢)などです。加えて大塚 崇教授、小村伸朗国立西埼玉中央病院院長、吉田和彦葛飾医療センター院長、秋葉直志柏病院院長各氏の就任祝賀会を盛大に執り行い、行事と慶事の多い一年でチェアマンとして嬉しい悲鳴状態でした。なお、2007年のチェアマン就任時に掲げた「医局員300人、教授・院長輩出30人」構想は過去13年で196名の新入医局員を迎えた事もあり、各々295人、29人と

当時達成不可能と考えられた目標達成が視野に入ってきました。2018年度の新入医局員は8名と久しぶりに二桁割れとなりましたが、現在の外科学講座の関連病院とその人員充足度、大学院進学数などを考慮すると適切な数でした。どの瞳もキラキラと輝いている志高い若者ばかりで、彼らが10年、20年後にも「外科医になって良かった」と思えるようなトレーニングを授け、そしてそのような医局でありたいと切に願っています。本稿の後に新入医局員の顔写真とプロフィールを掲載しましたので是非名前を覚え、同門会などで会った際にお声かけしてください。

最後に、報告があります。実は私が米国から帰国し慈恵医大に着任した2006年当時から逝去された鈴木博昭教授を含む学術諮問委員会のOB諸氏全員から「君の使命は長尾房大先生が1986年に日本外科学会を主催して以来の本学4回目の外科学会を主催する事であり、これは君の宿命である。そのためにも血管外科はもとより外科学講座を復活させろ」と言われ続けていました。今年で外科学会の理事に就任して4年目に入り、この間、国際委員会委員長として英国への臨床留学への道を拓きました。今日、英語圏でメスを振るえる機会は貴重で、多くの公募者を得ましたが、その中から選考した1期生が現在英国で無事registrarとして研修中で、2期生も2019年中に渡英する見込みで本計画は順調に船出しました。また、外科学会代表として渡欧4回、渡米5回し国際交流にも努めました。初期臨床研修における外科必修化を目的とした「外科必修化の復活WG」委員として土岐祐一郎委員長の指揮の下、2020年からの初期臨床研修での外科必修化復活に微力ながら貢献できましたし、現在進行中の非常勤麻酔科医問題にも日本麻酔科学会、国会議員さらに厚労省幹部と幾度も協議を重ね、全国アンケートを実施し、その実態把握を踏まえ解決策を模索しています。一つ、既に実行に移された施策は麻酔科学会専門医を更新する要件として常勤医であることが加えられたことですが、こうした活動がやがて地域における安定した外科医療の実践と継続につながるものと期待しています。外科医労働環境改善委員会委員として馬場秀夫委員長の下、21世紀の黒船来襲とも言える「働き方改革関連法」への対応をしています。国際化推進WG委員長としては、森理事長のご指示により、これまで交流のなかったアフリカ諸国との交流を模索しました。数ある学会の中から東南中央アフリカ外科系連合学会(COSECESA)をパートナー候補として選び、COSECESA理事会との交渉を経て同会の会長を2019年外科学会総会に招待し、逆に私がウガンダで開催予定のCOSECESA総会で講演する道筋を作ることができました。今後、アフリカ諸国の若手医師の受け入れ、技術指導や学会レベルでの交流に発展させたいです。また、同様の趣旨で現在インド外科学会(ASI)との交流の有り様も先方と交渉中で、まずは12月のASI総会に先陣として行って参ります。教育

委員会委員長として卒後教育セミナーと生涯教育セミナーのプログラム作成、これらセミナーと新専門医制度との整合性を図る事、さらに各種ガイドラインのレビューなどを行っています。日本医学会連合では外科学会代表の評議員として活動しています。

今年で帰国して14年目、外科学講座チェアマンに就任して13年目となりますが、この間、外科学講座は上述した通りめざましい発展を遂げると同時に膝元の血管外科も大動脈手術件数が着任前の数十倍に伸びるなど足元も固まりました。余談ですが、先日、私の論文引用指数は慈恵医大全教授中トップであるとの報告を慈恵医大のURAから受けました。新規関連病院もチェアマン着任後に増えた医局員数にあわせて15病院を順次獲得し、現在38病院となりました。これは将来の医局員の就職先確保という意味で「安らぎのある村社会」に一步近づけたと自負しています。私学とは言え首都圏ばかりでぬくぬくしてられない、との思いから立ち上げた「地域医療貢献プラン」では、新たに、新潟県、宮城県、福島県、栃木県、埼玉県、静岡県、高知県など各県の外科医不足地区や僻地にも地元の要請に応じて常勤外科医を継続的に派遣する事で貢献してきました。東日本大震災、茨城水害、熊本地震に際しても講座の求心力の高さを最大限活用し、人的・経済的支援を十分にしました。日本外科学会学術集会での当講座の演題発表数は10年連続50演題越えを達成しましたが、おそらくこれは日本一だと思います。何よりも全国的な外科離れが進む中、単に医局員が295人もいると言うことにとどまらず、消防士気質と求心力が高く、活気のある医局が誇らしいです。

アムンゼンが南極点に到達した時、そこに英国国旗を立てました。我々も2001年の講座統合以来、現役と同門が車の両

輪となり、幾多の困難を乗り越え、全国的な外科離れと個人主義が蔓延する中、大げさに言えば「慈恵医大外科の奇跡」を達成し、いわば南極点に到達したと言っても過言ではありません。アムンゼン同様に我々も我々が到達したこの高みを大地に刻み歴史に残そうではありませんか。残された大仕事は、旗を立てる事ですが、講座統合以来約20年、皆で心一つにして達成したこの足跡と実績を歴史に残すにあたり日本外科学会学術集会を1986年の長尾房大先生以来30数年ぶり(4回目)に慈恵医大で主催することはすばらしい目標だと思います。また、血管外科としても1990年の三島好雄先生(東京医科歯科大学)以来約30年ぶりとなり、二つの大きな使命と大義が存在すると言えます。前述の内外の情勢を鑑みると、少なくともそのドアをノックする資格を得る事はできたのではないのでしょうか。とは言え、、119年の歴史と会員数4万人、代議員数348名、理事19名を擁する外科学会を私立医科大学で主催するのは極めて険しく高い「頂」ですので今こそ、医局員295名と同門406名が再び心一つにして一丸となって歩みを進める必要があります。ただし、皆さんにお願いしたい事は実はシンプルです。すなわち、これまで通り活気ある医局カルチャーを維持しつつ、一人でも多くの命を救い、地域に貢献し、若手を育て、そして研究開発を推し進めることで学会と社会に貢献し続けることです。つまり従前通りの活動を続けるだけで特別なことを期待するものではありません。そしてこうした一人一人のたゆまぬ努力がなければそのドアは決して開かない事でしょう。いずれにしても、結果の如何にかかわらずドアをノックするところまで皆さんが連れて来てくれた事、そして13年間、重くのしかかっていた十字架を下ろせる日が近い事を心から嬉しく感じています。



慈恵医大外科学講座2019年1月12日